日本病院前救急救命学会

JSPELS newsletter

Japanese Society for prehospital emergency life-saving

創刊号
令和3年5月

一般社団法人 日本病院前救急救命学会 事務所　〒164-0001　東京都 中野区中野2-2-3 ㈱へるす出版内
E-mail:info@jspels.jp　　URL:https://jspels.com

ニュースレター創刊にあたり

一般社団法人日本病院前救急救命学会 理事長
（和歌山県消防学校長）　脇田 佳典

会員の皆様には、当学会運営に対し格別のご配慮を頂き厚くお礼申し上げます。

また、新型コロナウイルス感染症が長期化する中で、救急現場最前線・病院内などで活動を頂いている皆様、消防関係・医療関係の皆様に心より敬意を表します。

さて救急救命士制度が発足し３０年が経過しています。多くの先人が、荒野を開拓し道を造って頂きました。その功績は、多大なもので計り知れない苦労や努力があったと思います。折角の道筋を絶やすことなく更に進化しなければ受け継いだ私たちの存在意義がなくなってしまいます。先人が築き上げた人脈や信頼を損ねることなく救急救命士の存在意義を確立しなければいけません。また、折に触れて先人に教えを乞うことも必要であると思います。どうかその折には、ご指導をお願いいたします。

当学会が平成２６年当初より病院前救急現場の「学問の確立」を設立趣意として掲げ、自らが自己研鑽の場を求め、技術知識を高め、医療に関わるプロフェッショナルとなること、また目標・目的として１．救急救命士として専門資格の自覚を持ち、自律をする。２．救急救命士の活動の根拠を確立する。３．救急救命士の資格を活かした「社会貢献」を目指す。としています。これらを確立すべく１年に１度の学術集会や不定期ですがワークショップの実施、情報発信はメーリングリスト、SNSを活用して行ってきましたが、まだまだ十分でない状況は否定できません。本当に申し訳なく思います。しかしながらこのように会員の皆様にニュースレターをお送りすることができるようになりました。そして、ビッグニースといたしましては、本年６月に学会準機関誌「救急救命士ジャーナル」を創刊することとなりました。これまでご支援をいただきました皆様方に衷心より厚く御礼申し上げます。

このニュースレターと準機関誌は、救急現場における学問の確立をするためのものです。会員の皆様方から投稿を頂く論文が蓄積され救急現場学が確立されます。それが、救急救命士の自律への道となります。

現在、全国各地にメディカルコントロールが構築され、平成２８年には指導救命士制度が導入されています。指導救命士の活用により学会への発表を容易にする、救急救命士の生涯研修の指導などについても病院前特有のことと理解しております。この辺りにもスポットを当て全国の同志の声を皆様に届けていきたいと思います。そしてニュースレターと準機関誌を作り上げるのは、今後も会員の皆様のお力添えが必要不可欠です。何卒、会員の皆様方からの積極的なご意見ご支援をお願いいたします。

また、論文投稿などもお受けし学術の目標達成に向け努力いたしますので、積極的なご投稿をお願いいたします。

今回の創刊を契機として学会の発展に努力することを役員一同お誓い申し上げます。簡単ではございますが、理事長としてのご挨拶とさせて頂きます。

会員募集中

名称　**一般社団法人日本病院前救急救命学会**
設立年月日　2014年４月１日

■主な活動
- 学術集会の開催
- 会員向けワークショップの開催
- 救急救命士及び病院前救急医療に関する調査・研究、教育と普及・啓発
- 会員相互の情報交換および準機関誌の刊行
- 国内外における関係諸団体との交流

■会員区分
①正会員：本法人の目的に賛同し、所定の入会手続きにより入会した救急救命士の資格を有する個人
②賛助会員：本法人の目的に賛同し、事業を賛助するために、所定の入会手続きにより入会した医師、看護師などの医療職種、または救急隊員資格を有する個人
③名誉会員：本法人の発展にとくに功労のあった者で、理事会より推薦され、評議員会の承認を得た個人
④協賛会員：本法人の目的に賛同し、事業を支援するために、所定の入会手続きにより入会した個人または団体

■会員登録
入会金5,000円　年会費5,000円
（協賛会員団体50,000円／口）
会員登録は専用フォームからお申込みください。ご登録頂いたご住所に振込用紙を送付いたしますので、入会金・年会費をお振り込みください。
お振込が確認できた段階で会員登録いたします。
会員登録作業は月２回のため、お待たせすることがございます。また、お振込確認後の会員登録が完了した旨の連絡はいたしませんので、ご了承くださいますよう、お願い申し上げます。

日本病院前救急救命学会
会員申し込み専用フォーム

日本病院前救急救命学会準機関誌発刊のお知らせ

編集発行人／佐藤枢　発行所／株式会社へるす出版

学会創立からの悲願であった「救急救命士ジャーナル」が創刊されます。当面、学会員には無料配布を予定しております。是非とも、この機会にご入会くださいましてジャーナルをその手に取って頂きたいと思います。

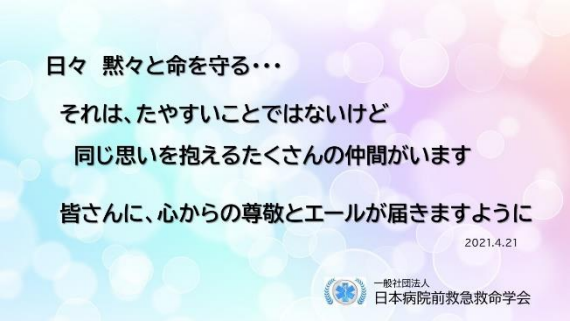
2021年６月１０日発行
頒布価格　（本体1,500円+税）
へるす出版のサイトからご購入いただけます

創刊号の目次（予定）

◆発刊にあたって
◆発刊を祝して
◆座談会１：「救急救命士ジャーナル」と
救急救命士のこれから
◆座談会２：大学院に進んだ救急救命士たち
◆救急救命士ジャーナルに期待する声
◆先駆者から探究者へ
～Messages for Seekers from Pioneers～
◆救急救命士の仲間たち
◆投稿論文

なお、会員皆様からの論文も随時受け付けております。掲載される論文の質と学会誌としての信頼性を保つよう、査読者による査読システムを採用しております。これまで投稿先がなく、半ばあきらめていた救急救命士の方々も胸を張って投稿いただけます。詳しくは救急救命士ジャーナル投稿規定、またはオフィシャルサイトをご覧ください。

教育研修委員会からのお知らせ



2021年４月２１日、本学会が運営するFacebookページに上のメッセージカードが投稿されました。

“大阪の救急隊員が大変な状況になっているそうだ。学会から大阪の救急隊員にFacebookなどでエールを送ってはどうだろうか”

教育研修委員会から意見が立ち上がり、メッセージや投稿内容などの検討が始まりました。“スピードが大切である”“学会から投稿することに意味がある”と委員会で提案し、学会の総意として発出されました。そして多くの人にシェアされ、Twitterにも投げられました。

なぜ大阪？ 東京やそのほかの地域だって・・・というご意見もあると思います。しかし、陽性者の数も特別、報道の陰で、深刻な状況で、日夜戦っている仲間がいます。そのことに多くの人が思いを寄せることに大きな意味があると考えました。救急隊員は、国民の健康と命を守るため、急なケガや病気で苦しんでいる人たちに寄り添い、制度の隙間を埋めて新しい救急業務へと成長させてきました。そして、これからもそれは変わりません。

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るうなか、大阪の救急隊は医療機関の選定一つとっても、血を吐くような苦労をされているとお聞きしています。

今、唇をかみしめ踏ん張っている隊員の皆さんへお伝えたしたい。全国の救急隊員の誰もが、皆さんと同じ志をもち、皆さんのことを思い、ともに日夜自分の果たすべき活動を展開しています。皆さんのご苦労からすれば取るに足りないことかもしれません。支えとして直接手を差し伸べることができない、成り代わって直接背負うことができない、なんという歯痒さでしょうか。そんな悔しさも含めて、どんな形でもいい、この状況を共有して支え合いながら、共に乗り越えようという気持ちを全国の人に伝えたいと思います。

“僕らは皆さんと同じ志をもって応援しています”

いつでも近くの救急隊員を心のはけ口にしてください。そのくらいのことしかできませんが、皆さんとご家族、大切な人の健康をお祈りしています。

スペシャル
寄　稿
会員からのメッセージ

温故知新

He that would know what shall be must consider what has been.

●榎本 暁

日本病院前救急救命学会選挙管理委員長／評議員
（元東京消防庁救急指導課統括 平成30年目黒消防署長にて退官）

1 はじめに

このたび、救急救命士ジャーナルが創刊を迎えられ病院前救急救命学会の準機関誌として発刊されたことを、心からお慶び申し上げます。
また、編集に携わった喜熨斗編集長をはじめ尽力された皆さまに改めまして感謝いたします。

2 温故知新

「温故知新」という筆者の好きなことわざがあります。「故きを温ねて新しきを知る」He that would know what shall be must consider what has been.（未来の事態を知りたいのなら過去のいきさつを考察すべし）過去のことをよく研究して、そこからあらためて新しい知識や意義を見つけ出すことです。
救急救命士ジャーナルの創刊を踏まえて、プレホスピタルの歴史について教壇では学べない裏話などを含めて故きを温ねてみたいと思います。

3 救急業務の発祥は横浜

本邦における救急業務は、神奈川県警察部が昭和８年（1933年）に横浜の山下消防署にアメリカ製のキャディラックの救急車を配置したことから始まります。このキャディラックは８気筒３２馬力、最高時速は４０ｋｍだったそうです。
続いて翌９年には、名古屋の中消防署が、同年１２月には東京の日本赤十字社東京支部が２台の救急車を保有し、それぞれ救急業務が開始されました。
東京では、消防を担っていた警視庁消防部（東京消防の前身）に、昭和１０年に㈶原田積善会からダッジブラザーズ社の救急車６台が寄贈されました。消防部では、旧軍隊で衛生兵の経験者を中心に６０人の救急隊員を選抜して、２ケ月間に147時間の救急講習を行い翌１１年１月に救急隊６隊で業務を開始しました。

4 カンフル注射

救急隊の発足当時から、救急車にはカンフル用の注射器を装備し、必要性が判断された場合にはカンフル注射が行われていました。筆者は、その昔、先輩に東京消防庁の救急部の地下倉庫に連れて行かれ「良いものを見せてやる。昔の救急隊は注射を打っていたんだぞ」とビタカンファーと書かれた注射器ケースを自慢げに見せられたのを今でも覚えています。この救急隊カンフル注射は、戦後も行われていましたが、昭和３２年１０月警察署内で意識不明の留置人に対して実施し、その後、死亡した遺族から暴行が原因と裁判となった事案で問題となりました。直接の死因とカンフル注射との因果関係は否定されたものの、この事案を契機に昭和３３年１月に注射器と注射液が救急隊から引きあげられました。

5 患者or 傷病者

当初、救急業務は、警察業務の一分野として執行してきましたが、昭和２３年３月７日消防組織法の施行に伴い消防が警察から分離独立し自治体消防の幕明けとなります。
しかし、救急業務を「消防」が行うことについては、法的根拠が不明確であり、その責任と義務を明らかにする必要性が求められてきました。
以後、様々な検討が行われ、昭和３８年４月に法律８８号により消防法の一部(第１条及び２条９項）が改正され、長年の懸案事項であった救急業務の法制化が実現されました。
第１条では「～災害等による傷病者の搬送を～」２条９項では「救急業務とは、災害による事故等による傷病者を救急隊によって医療機関へ搬送すること（要約）」と明記されました。
救急隊が医療機関へ到着し医師から「患者さんの容態はどうですか」と問われ「傷病者の容態ですが」と患者さんと表現せず「傷病者は」と頑なに回答する救急隊員は法令遵守を宣誓した公務員としての悲しい性かもしれません。ちなみに、後に制定される救急救命士法の条文でも傷病者が用いられています。

6 第１回救急救命士国家試験

平成３年４月２３日、救急救命士法が公布され本邦でのプレスピタルケアの充実に向けて第一歩がしるされたことは周知のとおりです。この救急救命士の創設にあたり「救急医療に関するテレビ報道」が大きく世間を騒がせました。その一躍を担ったのが黒岩祐治キャスター（現神奈川県知事）の「救急医療にメス」という報道番組でした。このマスコミ報道のキャンペーンの展開と相俟って救急隊員の処置範囲拡大の気運が高まったのは言うまでもありません。
筆者は、第１回救急救命士国家試験に合格して救急救命士の資格を取得しました。当時は、現職の救急隊長でしたので部下の手前、試験に落ちることも許されず、第１回ですので過去問題集も無く、看護師国家試験や臨床検査技師国家試験の過去問題集を参考に必死になって勉強しました。正直、消防の昇任試験より勉強したものでした。
平成4 年5 月２２ 日に第１回救急救命士国家試験の合格発表がありました。受験者数4,301 名合格者数3,177 名合格率73.9% 性別男性1,260 名女性1,917 名でした。合格者が女性の方が多いのは、当時は看護師免許の取得者にも受験資格が認められていたからです。
第１回救急救命士国家試験の合格発表には、あの黒岩知事も会場に現れていました。
「あなたのお陰で死ぬほど勉強し苦労しましたよ」と申し出て記念のツーショットを撮らせて頂いたのも今では懐かしい思い出です。

黒岩祐治 氏とのツーショット

７ 「救急救命士」名称の由来

医療機関には、三次施設として「救命救急センター」があります。救急救命士発足当初には、この「救命救急センター」の名称からか「救命救急士」と間違えて呼称する医師が少なくありませんでした。
救急救命士法成立の過程において、厚生省（現厚生労働省）で新たな国家資格を作るべきかどうか、作るとすればどういうものにするのか、を救急医療体制検討会で議論されていました。この検討会において「救急隊員の応急手当及び救急医療に関する新たな身分制度についての小委員会」が平成２年１０月に設置され、その中で「新たな身分制度となる」名称について検討がなされました。「救急救命士」という名称については、検討会の柳田邦男委員により「新たな職種に向かって、それになりたいというような夢を与える名称にすべきである」との発言もあり、多くの名称が候補となりましたが、救急の搬送途上で患者の救命率を高めるという意味から「救急救命士」という名称に落ち着いたとのことです。

８ 関東三兄弟の暗躍

救急救命士が救急現場で活躍するようになり、各地で救命士会という救急救命士の自己研鑽の場が立ち上がりました。その先駆けとなったのが救急救命士法が制定された翌年の平成4 年１１月に設立された横浜救命士会だと思います。また、筆者の地元、千葉県の北総救命会も活発な活動を展開していました。1999 年に発生したトルコと台湾の大震災において国際緊急援助隊の救助チームで救命活動を実践した筆者も経験談を講演させて頂きました。
国家資格を取得して名実ともに医療従事者となった救急救命士は、各地で開催された医学会や学術研究会に参加し意見を述べるようになりました。
そんな中、関東三兄弟と呼ばれ一世風靡した救急救命士の強者がいました。長男が筆者。次男が横浜消防の張替救急救命士、三男が野田消防の関根救急救命士です。先ずは関根救急救命士が質問に立ちます。「野田消防の関根ですが、その発表内容は救急現場では、、」と口撃します。たじろいだ演者を医者が「共同演者ですが、、」と弁護します。すかさず「横浜消防の張替ですが、やはり救急現場では、、」とダメ押しして、最後に「東京消防の榎本です。救急現場というのは、、」と三連打で撃沈させます。後述する外傷セミナーでも全国各地を荒らしまわった関東三兄弟ですが、次男は横浜消防を中途退職し国士館大学の教授に、三男も野田消防を中途退職し京都橘大学の教授になり、それぞれ救急救命士の育成に奮闘されています。

JPTEC 協議会10 周年記念式典にて
（左から関根教授、張替教授、筆者、坂本帝京大学病院長）

９ 黒船「外傷セミナー」の到来

2000年の１０月頃にアメリカからBasic Trauma Life Support(BTLS)、現在のITLS病院前救護における外傷処置に関する救急隊の教育訓練コースいわゆる外傷セミナーが突如として到来してきました。
さらに、本邦の外傷現場に適合するように改良されたPrehospital Trauma Care Japan(PTCJ)も全国各地で普及啓発されていきました。PTCJ は、その後、現在のJPTEC へと発展していったのは周知のことだと思います。
当時の救急現場では、俗に「トンボ回し」と言われ「大出血なし」「嘔吐なし」「四肢の変形なし」と人差し指を回しながら現場環境を確認して、傷病者の右側に座り救急処置を開始する手法が主流でした。ところが、アメリカから黒船の如くやってきた外傷セミナーは、現場の安全を確認した後に、いきなり傷病者の頭部を両手で保持し頸椎損傷を防ぐことから救急処置が始まる全く新しい手法でした。さらにスクープストレッチャーからバックボードへ、スクープ＆ランからロード＆ゴーへと見たことも聞いたこともない新たな技法に驚愕されました。
新しもの好きの筆者もPreventable Trauma Death（防ぎえた外傷死）撲滅を目指して活動する次男や三男に誘われて第2 回いわみ外傷セミナーPTCJ を受講しました。受講者の控室では、あの中島みゆきの「地上の星」が流れていました。この「地上の星」はNHK で放送されていた「プロジェクトX」のテーマソングです。受講生には、救急救命士だけではなく、名だたる救急医の先生方もいて、とても感動したものです。
PTCJ インストラクターの資格を取得し、関東三兄弟で全国を行脚したのも楽しい思い出です。
一方、東京消防庁でも救急隊と救助隊が融合して活動技術を練磨するR＆A 東京救助救急研究会が平成１３年に発足しました。東京救助救急研究会は東京消防庁の体育文化部会として公認された研究会です。その活動の場として東京外傷セミナーと称し、都内の医療機関を中心に、医師、看護師、救急救命士、救助隊員の多くがJPTEC を受講し顔の見える関係を築き上げています。

１０ 故中村一郎栄誉救急救命士

関東三兄弟と共に全国各地を飛び回りプレホスピタルケアの充実発展に多大な貢献をした同志の故中村一郎栄誉救急救命士について語らしていただきます。
彼は、さいたま消防を中途退職し埼玉医科大学国際医療センターへ転職されました。今までは、救急現場から傷病者を医療機関へ引継ぐ立場でしたが、今度は逆に傷病者を受け入れる立場となりました。そこで、傷病者の受け入れを依頼する救急隊と引継ぐ医師とのあり方について、大学病院における救急救命士の役割について研究し模索していました。医師と救急救命士とが互いに協力してPreventable Death（防ぎえた死）の撲滅という崇高な使命の達成に果敢に挑戦していたのです。
彼とは、救急救命士の将来像について真剣に議論し夢見た同志でしたが、残念ながら志半ばにして他界してしまいました。
日本病院前救急救命学会では、栄誉救急救命士として偉業を称えて表彰したことを記憶に留めて頂けるようお願いします。

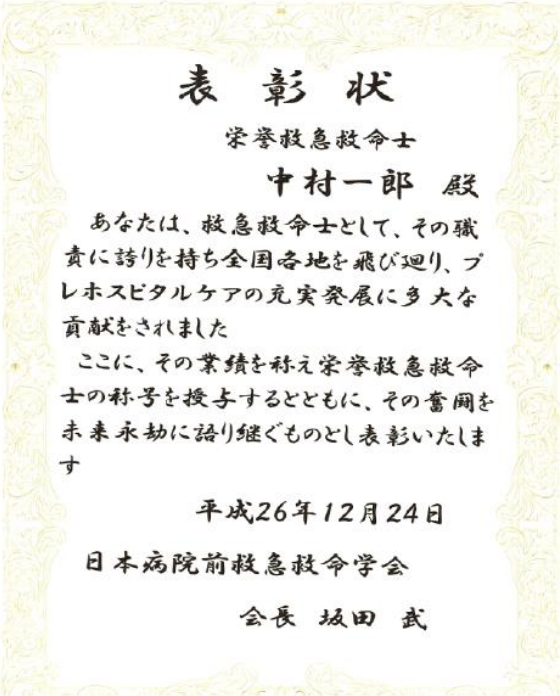


表　彰　状

栄誉救急救命士

中村一郎　殿

あなたは、救急救命士として、その職責に誇りを持ち全国各地を飛び廻り、プレホスピタルケアの充実発展に多大な貢献をされました

ここに、その業績を称え栄誉救急救命士の称号を授与するとともに、その奮闘を未来永劫に語り継ぐものとし表彰いたします

平成26年12月24日

日本病院前救急救命学会

会長　坂田　武

１１ おわりに

日本病院前救急救命学会の初代理事長は、筆者が救急人生を歩んできた中で最も尊敬し師と仰ぐ北九州市消防局の坂田師匠です。

師匠とは、その昔、救急振興財団で共に働いたことがあります。もちろん筆者の勤務地は東京で師匠は救急救命九州研修所に勤務し、それぞれ救急救命士の育成に携わっていました。当時から九州には、凄い救急救命士がいるとの噂がありましたが、実際に本人に会ってみると想像を遥かに超えるほど、救急救命士の将来について「自律」や「社会貢献」のあり方を見据えた考えを持たれていました。

本学会も順風満帆で設立となったわけではありません。以前、活動していた全国救急隊員・救急救命士学術連絡会の運営が頓挫し、身を切る覚悟で新たに苦難を乗り越え初代坂田理事長が引受けて発足しました。

初代坂田理事長から脇田理事長へと移り変わり、学会準機関誌として救急救命士ジャーナルが創刊されました。新たな時代の幕開けに期待し、日本病院前救急救命学会の益々の発展を祈念し筆を置きます。

■参考文献
横浜市救急救命士会HP
救急の半世紀,東京消防庁編
救急救命士への長い道,近代消防社
２１世紀の我が国の救急医療,第一法規
東京消防庁五十年のあゆみ,東京消防庁
プレホスピタル外傷学,永井書店
救急救命スタッフのためのBTLS,メディカ出版
JPTEC 協議会１０周年記念誌,一般社団法人JPTEC 協議会

JRC蘇生ガイドラインがすべて公表されました

JRC蘇生ガイドラインが新しくなり、３月３１日に全て公表されました。COVID-１９ による感染対策のため、多くの作業部会員が対策の第一線で懸命な診療にあたったため、ガイドライン作成の作業が遅延しました。それでも、多くのメンバーの精力的な活動により、私たちがドラフト版を目にすることができました。

さてその内容は

現在、日本蘇生協議会のオフィシャルサイトには、急性冠症候群～二次救命処置の合計１１編のドラフト版が公開されています。*2021年４月末現在（https://www.japanresuscitationcouncil.org）

私たち救急救命士にとって興味のあるBLS、特にCPRに関しては、ガイドライン2015の手法を踏襲することとなっています。

そんな中、バイスタンダーとして関連する内容を少し紹介していきたいと思います。

一般の方が119番通報する手段として、携帯電話の使用が推奨されています。通報と同時にスピーカーを作動させ、通信指令員の口頭指導をうけることまで手順として書かれています。このことは、固定電話が主流だった時代に議論された“心マが先か？通報が先か？”に半ば決着がつくような形になりました。

傷病者の反応を確認する際、痙攣の有無もCPR開始の判断になりうることが書かれています。このことは、通信指令員が心肺停止を判断するための材料になりそうです。また、重要なアウトカムとして“胸骨圧迫による有害な内臓損傷はない”といえる観察研究の紹介もありました。バイスタンダーがCPRを実行することへ大きな勇気を与えてくれます。

新たな章として妊産婦の蘇生が追加されました。妊娠後半の妊婦の CPR には，用手的子宮左方移動を行うことを考慮する（妊娠子宮による腹部大血管の圧迫を解除する）ということですので、これは覚えておきたいですね。

気道異物の除去では、まず比較的容易に行える背部叩打、効果がなければ腹部突き上げを実行するという具体的な順序が示されました。

ファーストエイドの章では、病気とケガに内容が大別されています。低血糖、失神前の対応は、知識としてそれほど難度の高いものではないので、一般の方にも積極的に普及していきたい事柄です。使用しないことを提案されている頸椎カラーについては、救急隊の活動要領にもかかわる内容です。今後、注目していきたいと思います。

救急救命士ジャーナル投稿規定

1. 名称
　名称は、救急救命士ジャーナルとし、本誌の英文名は“Journal for Emergency Life-Saving Technician ”とする。

2. 目的
　本誌は日本病院前救急救命学会の準機関誌であり、病院前救急救命学の進歩と発展に寄与することを目的とする。

3. 投稿資格
1)　筆頭著者は本学会の会員に限る。ただし、編集委員会が寄稿を依頼した場合は、その限りではない。著者の人数は１０名以内とする。
2)　投稿論文は二重投稿ではない旨を明記した「誓約書」に必要事項を記入して添付すること。

4. 論文の受付
　論文の受付には以下の要綱を満たす必要がある。
1)　著者の人数が １０ 名以内である。
2)　8. 文章執筆要領に則した記述である。
3)　投稿論文は二重投稿ではない旨を明記した「誓約書」及び、申告するCOIがある場合はCOI 申告書を提出している。

5. 論文の採否
　投稿論文の採否は編集委員を含む３名で査読後、編集委員会の審査によって決定し、採用となった場合はその日をもって受理年月日とする。

６. 投稿内容
1)　本誌への掲載は救急救命士及び病院前救急救命の領域の論文とする。
2)　論文は国内で未発表のものに限り、二重投稿は禁止する。ただし、海外で日本語以外の言語で発表した論文を日本語で記載しなおした場合は二重投稿とはみなさないが、著作権の保有者に使用許諾を得ていること、及びその場合の論文カテゴリは、「資料」とし最初の論文の掲載誌を明記する。

７. 投稿論文の種類
　論文の種類は、総説、原著、調査・報告、症例・事例報告、資料・その他とする。
１)　総説
多面的に国内外の知見を集め、文献調査に基づき、総合的に学問的状況を分析・概説し、考察したもの。
２)　原著
論文の体裁(目的・対象と方法・結果・考察)が整っており、研究内容に新規性、独創性があり、方法の信頼性、妥当性が高く、その知見が論理的に示されており、学術的価値の高いもの。
3)　調査・報告
独自に行った調査等の結果をまとめ、報告並びに解説したもの。
4)　症例・事例報告
単独または複数の症例や事例をまとめ、考察を加えたもの。
5)　資料・その他
編集委員会が適当と認めたもの。

8. 文章執筆要領
1)　原稿はパソコンの文書作成ソフト（Microsoft® wordなど）にて作成し、A4判横書きで、40字×30行で行ページ設定する。
2)　現代仮名遣いに従い、医学用語を除き常用漢字を用いる。
3)　度量衡の単位はCGS単位を用いる。
4)　統計処理を行った時は、統計学的検定法を明記する。
5)　しばしば繰り返される語は略語を用いてよいが、初出の時は完全な用語を用い、以下に略語を使用することを明記する。（例）心肺停止（cardiopulmonary arrest、以下CPAと略す）
6)　図、表、写真の引用は該当文章の末尾とする。
7)　原著の本文は、はじめに、目的、方法、結果、考察、結論の順位に記述する。
8)　症例・事例報告の本文は、はじめに、症例、考察、（結論）の順に記述する。
9)　論文の本文には頁数を付す。
10)　ランニングタイトルは２０字以内とする。

9. 和文要旨
　400字以内の和文要旨をつける。

10. 索引用語
　原則として日本語とし、総説、原著、調査・報告は5個以内とする。索引から目的の論文を確実に検索できるようなものを選択する。

11. 字数制限
　原稿は本文、図表、写真、文献を含めて12,000字以内とする。図、表、写真は縦５cm×横７cmに縮小印刷が可能なもの１点を400字相当と換算する。

12. 図、表、写真
1)　図、表、写真には図１、表１、写真１などそれぞれに通し番号をつけ、日本語でタイトルを表記する。
2)　写真は解像度が高いものが望ましい。
3)　本文内に図、表、写真、の挿入箇所を示したうえで、用紙１枚に１点とし、「図、表、写真番号、」「タイトル」「説明文」を記載する。
4)　元データがある場合は提出する。
5)　図、表、写真等を引用・転載する場合は、著者自身が著作権者の了解を得た上で、出所を明記する。
6)　図表は原則としてモノクロとする。カラーでの掲載を希望する場合はカラー掲載料を著者が負担する。

救急救命士ジャーナル投稿規定

13. 文献
1)　文献は本文中に上肩付した引用番号順に配列し、２０編程度とする。
2)　著者は筆頭著者から３名までは明記し、それ以上は「他」または「et al」とする。
3)　雑誌名略記は医学中央雑誌刊行会・醫学中央雑誌収載誌目録略名表及び Index Medicusに準ずる。
4)　文献記載例
＜雑誌＞
引用番号）著者名：題名．雑誌名　発行西暦年；巻：頁-頁.
1）片山祐介, 北村哲久, 清原康介, 他：救急電話相談での緊急度判定で緊急度が低かった救急車出動事例の検討．日臨救急医会誌 2018；21：697-703.
2）Kinoshi T, Tanaka S, Sagisaka R, et sl：Mobile Automated External Defibrillator Response System during Road Races．N Engl J Med 2018；379：488-489.
＜単行本＞
引用番号）著者名：分担項目題名．編者名．書名．(巻). (版). 発行所，発行地，西暦年，p頁-頁.
１）鵜飼卓：阪神・淡路大震災．鵜飼卓他編．事例から学ぶ災害医療．南江堂，東京，1995, pp35-48.
<WEB サイト>
引用番号)サイト機関：ページ名.(改行)URL(最終アクセス日：yy.mm.dd)
１）総務省消防庁:平成３０年度版救急救助の現況. https://www.fdma.go.jp/publication/rescue/post7.html(アクセス日：2020.1.26)

14. 倫理規定
1)　投稿論文のなかで、臨床に関わるものにおいては、傷病者や被験者ならびに特定の個人の人権を損なうことのないよう、必要に応じて倫理委員会による審査を得るなどして、十分配慮されたものでなければならない。
2)　個人が特定される年月日などの記載は臨床経過を知るうえでの必要最小限にとどめ、プライバシー保護に留意すること。
3)　実験動物に関わるものにおいては、動物愛護の面に十分配慮されたものでなければならず、必要に応じてその旨を記載する。

15. COI（利益相反）の開示
　全著者の投稿内容に関連する企業や営利を目的とした団体からの資金援助等の利益相反関係を開示しなければならない。

16. 校正
　掲載直前の最終校正は著者校正とするが、その際、大幅な追加、削除は認めない。

17. 別刷り
1)　発注は１０部単位とし、製作費の実費を支払う。
2)　注文は著者校正時に行う。
3)　料金の支払いをもって発注完了とし、発注完了後 1か月を目途に納品する。

18. 論文の著作権
　本誌に掲載された著作物の著作権は、著者と日本病院前救急救命学会の両者が保持するものとする。

19. 原稿の投稿方法
1)　論文投稿は電子媒体のみ受け付ける。
2)　著者は、図表入り完成原稿、図表ファイル(PDF形式以外)、誓約書(書式A)を本学会事務局に電子メールによって送付する。
3)　COIの申告がある場合には、「投稿時COI(利益相反)申告書」（書式B）を合わせて送付する。
4)　著者は査読結果が通知された後、論文に修正が必要な場合は、１ヶ月以内に修正した論文、および査読コメントの回答文を返信する。
5)　著者は採択後の校正作業を１ヶ月以内に行う。

学会オフィシャルサイトでは以下のドキュメントをダウンロードいただけます

日本病院前救急救命学会
オフィシャルサイト
https://www.jspels.com

【誓約書・COI申告様式】
誓約書、および申告するCOIがある場合はCOI申告書をご記入ください。

【投稿論文の査読に関するルーブリック】
査読者は投稿論文に対してこのルーブリックの評価項目を元にして査読を行います。

【論文投稿の流れ】
論文を投稿された際の採択までの流れを示した資料です。ご参考にしてください。

第７回日本病院前救急救命学会学術集会開催概要のご案内

第7回日本病院前救急救命学会学術集会会長
（国士舘大学）　津波古 憲

ニュースレターをご覧の皆さま。このたび、第７回日本病院前救急救命学会学術集会を令和３年１０月３１日の日程で開催させて頂くことになりました。第７回学術集会は、新型コロナウィルス感染症対策として、WEBで開催致します。WEBで開催することで、コロナ禍において、安全でより多くの皆さまが参加しやすい環境を提供できるかと思います。第７回学術集会のテーマは、救急救命士法の改正に伴い、今後、働く場所の多様化が予想されることから、救急救命士が目指す将来像～それぞれの現場におけるprofessional autonomy～としました。また、プログラム内容は実行委員と共に、前回大会や当学会員向けのアンケート調査結果等を参考にして、興味・関心を持って頂けるプログラムを企画致しました。一つでも多くの学びを持ち帰って頂けるよう、日々準備を進めております。皆さまのご参加を実行委員一同お待ちしております。

【開催概要】

開催日時：令和３年１０月３１日（日）９時００分～１７時００分
方　式：WEBによる中継（＊一部録画予定）Zoom ウェビナー
テーマ：救急救命士が目指す将来像
　　～それぞれの現場におけるprofessional autonomy～
会　長：国士舘大学　体育学部スポーツ医科学科　津波古　憲
プログラム：（LIVE配信ほか）

第24回日本臨床救急医学会学術集会併設セッションのご案内

【会期 】LIVE配信：2021年6月１０日（木）～１２日（土）
オンデマンド配信：2021年6月１０日（木）～３０日（水）
【テーマ】
新型コロナ患者（疑いを含む）の搬送及び収容医療機関の実際と課題について
【セッション形式】
パネルディスカッション９０分（ディスカッションも含め、全て録画を行う）
【Zoom参加対象】
第２４回日本臨床救急医学会学術集会参加者
※事前登録予定者含む

【座長】
中川 貴仁（弘前医療福祉大学短期大学部:青森県）
竹田 豊（出雲市消防本部：島根県）
【パネリスト】
小山内 健一（弘前地区消防事務組合:青森県）
北村 浩一（石橋地区消防組合：栃木県）
北原 学（国立国際医療研究センター：東京都）
木村 信広（泉州南消防組合：大阪府）
古賀 司（米盛病院：鹿児島県）
【特別発言者】
松田 潔（第２４回日本臨床救急医学会学術集会会長）

編集後記

学会設立以来の悲願である救急救命士ジャーナルが創刊されることとなりました。それに先駆け、ニュースレターとして世にコマーシャルを打つことができました。準機関誌の発刊に際して、榎本氏より大変な文量の投稿を頂きました。紙面の都合によりジャーナル掲載には至りませんでしたが、ニュースレター掲載を打診したところ快くお許しを頂けました。ありがとうございました。読み手によっては「時代錯誤」というご意見もあろうかと思いますが、温故知新というタイトルの通り、自分たちが切り開いて学問の道を作らなければならない救急救命士は、昔のことを聞いたり考えたりして足元を見つめなおし、先に向かって進むことはとても大切です。そんなことを改めて気づかせてくれた大変貴重な内容でした。まさに本学会のスタンスにぴったりでした。
学会活動としましては、１０月３１日に予定している本学会の学術集会の開催告知をいたしました。前回に引き続きZoomウェビナーによる配信ですので、遠方の方でも気軽にご参加いただけることと思います。まもなく一般演題の登録も始まると思いますので、奮ってご応募ください。（T.Ichiryu）

日本病院前救急救命学会
オフィシャルサイト
https://www.jspels.com